

# 明治「史伝」と鷗外「史伝」

——明治二十～三十年代を中心に——

目野由希

## はじめに

鷗外「史伝」の「史伝」とは何かについては、これまで作品論、作家論、語の典拠等からの演繹的な定義がなされてきた。

だが、ジャンルを論の対象自身から演繹して定義するのは難しい。そのため、明確な定義がなされぬまま、現在でも「いわゆる「史伝」とカッコ付きで語る慣行が続いている。

本稿では、「史伝」という語の用例から、帰納的に「史伝」の定義を求める。平行して、鷗外による「史伝」も考察する。

また、本稿で扱う時期は明治期を中心とする。

研究・批評や全集編纂結果など、二次資料から導き出された概念、「いわゆる鷗外「史伝」と、鷗外らによって直接書かれた「史伝」は、別の対象である。後者の「史伝」を扱う場合、用例の母体は、明治期を中心とするのが妥当ではないかと思われる。

鷗外「史伝」の場合、大正期以降のテキストとするのが研究史上の

通例である。だが、生前の鷗外が書いた「史伝」とは、一八九七（明治三十）年の雑誌『美術評論』中、「史伝」欄に連載された西洋美術史（大村西崖との共同執筆）のみである。

この、明治三十年代までの「史伝」と、特に一九四〇年代以降の研究・批評制度によって特殊化された用語「史伝」では、用法が全く異なっている。両者にはほとんど有機的な関連は見出せず、それぞれ別の用語・問題として論議されるべき特性を備えている。

昭和「史伝」の問題は別稿に譲り、本稿では、明治期の「史伝」について考察する。<sup>①</sup>

なお、本稿では一般に現在、「鷗外「史伝」と称されている大正期の森鷗外の伝記的作品を、「いわゆる鷗外「史伝」と呼び、時期を限定しない、鷗外の手になる歴史記述テキスト全般を「鷗外「史伝」と呼ぶ。

## 1

現在、『国会図書館所蔵明治期刊行物図書目録』を開くと、「史伝」を題に用いたテキストは、歴史・伝記など、複数ジャンルに拡散して分類されている。これは、現行の細分化されたジャンル概念と、明治期の広義の「文学」に該当するジャンル概念との、折衷の結果といえる。

平岡敏夫氏は、「明治二十年代の文学的現実」から言えば、史論家なども「文学者」と考えるべきと指摘する。<sup>(2)</sup>この指摘は、当時のジャンル意識では、広義の「文学」に歴史記述全般が包括されるという文脈上にあるといえよう。

例えば、史論家山路愛山による、史学と一般向け歴史物語との相違の説明のなかに、史学と対峙する物語の一種として「史伝」に言及した、明治四十二年の文章がある。

……芸術的史伝の興感を求めて得ざるものに粗末ながらも其香味を与ふるものなり。尊攘紀事、偉人伝、開国始末、幕府衰亡論、吉田松陰、二千五百年史の如き名家の著述を以て講釈師の張扇子に比するは些か不倫の嫌なきに非ずと雖も、其人民の興感を催すを主としたる史伝たるにいたりては即ち種類を殊にするものに非ずと云はざるべからず。……

此の如く一方に於ては芸術的の歴史が民間に行はるゝと共に他

方には国家の保護に拠りて考証を主とし史実を求むるを旨とする新式の史学は国民の深く注意せざる間に次第に発達せり。(「人物月旦」欄、「日本現代の史学及史家」『太陽』、一九〇九(明治四十二)年九月、傍線目野)。

平岡氏の指摘する「文学」概念は、「文学」が小説とはむしろ別のニュアンスを持っていた時期の、広義の概念である。<sup>(3)</sup>「愛山が「文学」から遠ざかって行く」過程と、「文学」が狭義に限定されて行くコース」との重複。これは、「史論」「史談」「実歴」等の複数の概念を含む広義の「文学」概念が、再編成を繰り返した結果から、最終的に「文学」＝小説という単純な概念に至る、時間とジャンルの過程を指すといえるであろう。

愛山についてのこの平岡氏の解釈を、吉田正信氏の『家庭雑誌』についての指摘と平行して参照すると興味深い。

吉田氏は愛山の「一八九二(明治二十五)年八月の民友社入社が、『国民之友』に九月からの「史論」欄創設、同月創刊の同社の『家庭雑誌』の「史談」欄創設に及ぼした影響について言及した後、「……前記の欄名の推移——「文芸」欄と「史談」欄があるうえに「談叢」欄が加わり、さらに「小説」欄が加わり、最後は「文芸小説欄」ができるという変化は、編集部で小説という概念が認められていく過程を物語っており、作品の出来栄ともども大変興味深い」と述べる。<sup>(4)</sup>

他の雑誌に関しても、同様の指摘がある程度まで可能である。例え

ば『早稲田文学』では一八九八（明治三十一）年までの第一次『早稲田文学』のみ、『太陽』では創刊年の一八九五（明治二十八）年のみなど、明治二十〇三十年代を中心として雑誌の欄分類に「史伝」欄が登場し、それ以降は消えるケースがしばしば見出せる。

雑誌の欄分類名は、需要側と供給側にコンセンサスを持つ、同時代のジャンル編成を反映する。その点から言えば、雑誌の欄名として流通している語は、当時にあつては一つのジャンルと称して差し支えなからう。ただし、次第に用いられなくなる暫定的な存在であつたのは確かである。

この「史伝」という欄名・分類概念は、时期的にも分類傾向としても、「史談」「史論」「雑録」等と重複・平行して登場する。<sup>(5)</sup>このため、「史伝」をこれらと別個に定義するのは、早計であらう。

また、「史伝」欄のみに限定しても、テキストの内容の幅はきわめて広い。この枠内には、回顧談・美術史・国内外伝記・少年向け読み物等が包括されているのである。

例えば、次の三例はいずれも明治二十〇三十年代に、雑誌の「史伝」欄に掲載されたテキストである。これらを概括して定義しなければならぬのなら、その定義はごく緩やかになる。

まず、少年向け読み物としての「史伝」。

坤円球上、国はおほかれど、国民の精神の、雪の如く、花の如き、我日本帝国の如きは、また、いつごにかある。日本国民は、

過去の歴史において、その経営したる事業は、きはめて、おもしろく、また、きはめて、をしく、いまだ、いさゝかも日本帝国の美なる山川をけがしたることはあらざりしなり。見よ、富士の高根の雪は、神代ながらの色を見せ居るにあらずや。よし野の川の桜の花は、今猶、そのにほひをあらためざるにあらずや。金甌無欠の国体をたもち、万世一系の天皇をいたゞき、これより後将来にほどこすところの、われ／＼国民の事業は、また、決して、祖先の志にそむき、祖宗の天下を危うするが如きことはなからむ。  
（落合直文「三韓征伐」『少年世界』（「史伝」欄連載、第一号（明治二十八年一月一日））<sup>(6)</sup>）

次に西洋美術史。

藝術の萌芽

人類の建立したるもの、最も古きは墳墓 Tumulus なりとす。想ふにこは争闘に死したる人の爲に築けるならむ。この遺存せるもの今リジャ Lydia（小亞細亞地方）に在り。またクリミヤ Crimea（黒海の半島）に在り。（第一図・（以下図版略・日野注））その制たゞ土を堆くしたるあり、石を立てたるあり、または数石を贅積したるあり。後者に属するものは、或は石贅卓 Dolmen（第二図）を成し、或は石環 Stonehenge（第三図）を成す。石環中間々数環を重ねたるものあり。（第四図）既にしてこの上方なる石層を斗出せしめて以て龕の形を為

し、(第一図) また柱めきたる石を豎て、重みを支へ、以て始めて門の形を為せり。およそ是等の遺物は、北はスカンデナキヤSkandina-viaに至り、南は亜非利加の北岸に至るまで、随所にこれを存す。(無名氏〔鷗外・大村西崖〕「西洋美術史」『美術評論』(「史伝」欄連載、第一号(明治三十年十一月十四日)<sup>7)</sup>)

最後に訓話としての「史伝」。

少く道に欠けたればとて、天下無類の悪人の如く責め罵り、殊に礼儀作法を何物よりも有難きものゝ如く、かつきまわして、少しのことにも口喧ましく、下駄のぬぎ方はしかじかなり、飯の喰べ方はしかじかなり、さては帽子のかぶり方より帯のしめ方まで彼是れ罵り責め、曉より日の入る頃まで、我が子の一言一行を是非詰責する親御あり。ゲーテの父の如きは、乃ち……(中略)……家内にありて權力を代表する審判人とも見るべき父君たち、須く律義道德の形骸に拘泥することなく、少く融通のある心になりてその子女に向はるべし。然らずは、義心却て天下の悪を起し、慈悲却て残忍過酷の態を帯ぶるに至らんかな。(有美「ワシントンの父とゲーテの父と」『女学雑誌』(「史伝」欄不定期掲載、第四百七十五号(明治三十一年十一月十日)<sup>8)</sup>)

以上の明治「史伝」の共通項から定義を求めるならば、それは「中

間的な歴史記述」程度になろう。

このような緩やかすぎる定義は、定義とは認めにくい。しかし、「文学」概念の変遷経緯、またジャンル名としての「史伝」(「史論」「史談」等)の暫定性を考慮すると、中間的であること、歴史記述一般を含めることの二点を指摘できれば、十分なのではないかと思われる。

特に明治三十年代では、広義の「文学」概念(「歴史・美術・哲学・文学」<sup>9)</sup>)に該当すると見なされ、先に挙げた三例のテキストが同一枠内に括られるのは、むしろ自然といえよう。

一つだけ注意しておきたいのは、「中間的な歴史記述」という定義が該当するのは「史伝」一語に限らず、「史論」「史談」「雑録」等の語でもある点だろう。これらの語は執筆者・出版社・雑誌などによって、それぞれに選択されている。先には民友社の「史談」(『家庭雑誌』)と「史論」(『国民之友』)の例を挙げたが、「史伝」は博文館の場合、歴史記述一般を指す語として、しばしば用いられている。<sup>10)</sup>

このような主観的なカテゴリーによる語の用法を考察するには、様式概念を援用するのが妥当であろう。つまり、明治期における「史伝」カテゴリーの用法には、欄分類名としての「史伝」ジャンルと、主観的標徴に基づく明治「史伝」=時代様式としての「史伝」の二種類が、同時に存在するとみなすのである。

先述のように、鷗外資料といえる「史伝」は、一八九七（明治三十）年の『美術評論』「史伝」欄の西洋美術史のみである。

西洋美術史としての「史伝」は、明治三十年代の「文学」概念の下の、歴史記述テキストであろう。つまり、鷗外と鷗外の同世代人にとり、当時の中間的な歴史記述の用語に「史伝」（あるいは「史論」「史談」等）が妥当する蓋然性は高い。

時代のずれを考慮すると、この「史伝」と鷗外没後の「史伝」を、ただちに一括することはできない。大正期には、すでに「文学」概念は、狭義となっているからだ。

それでは、鷗外死去の翌年の一九二三（大正十二）年、鷗外全集刊行会によって、第七・八・九巻を「史伝篇」とする全集が刊行された点を、どう考えるべきであろうか。

『荷風全集』<sup>(1)</sup>第十五巻の鷗外についての諸文をみると、鷗外個人全集編纂に関する文中に「史伝」の語も見られる。だが、この用法は確定したものではない。以下のような、暫定的な用法なのである（傍線目野）。

全集印刷の校正につきて漢字国語の疑義あるものは、吉田増蔵、山田孝雄の両家に問うて之を訂し、史伝考証に関するものゝ質疑

は浜野知三郎君之を判定すべく……（『鷗外全集刊行の記』、一九二二）

先生が晩年に大成せられた所謂考証文学の中には、純然として史伝の研究に属するものと、江戸古老の随筆を読むが如き思をなさしめる軽快なる文章との二種がある。（『東京堂版鷗外選集第八巻解説』、一九四九）

……大正五年に先生は軍職を退かれ、二年ほどして後上野の博物館長になられたが、この間に先生の歴史物または考証文学は遺憾なく完成された。日々新聞に連載された渋江抽斎、伊沢蘭軒、北条霞亭などいふ儒家の伝記である。（『鷗外記念館のこと』、一九五九）。

要するに、全集編集者の一人荷風は、「史伝」に明快なジャンル定義を与えていない。また、「考証」などではなく、「史伝」という語であるべき必然性も見出せない。

むしろ、ここでみられる「文学」と「史伝」の関係は、広義の「文学」と「史伝」（あるいは史論など）の関係にある。つまり、全集編纂者も「史伝」を、現在用いられている概念では用いていないのだ。

先に述べたように、明治二十〇～三十年代の広義の「文学」概念は、歴史記述一般や読み物等を包括する、上位の概念であった。（『考証』）

文学」の中に「史伝」と随筆風の「文章」を置くのは、このジャンル意識上からは、順当な説明といえよう。

似た例を挙げれば、博文館の一九〇四（明治三十七）年の『樗牛全集』でも、「史論及史伝」は全集の分類項目名として用いられていた。テキストを分類する際、今で言う「伝記」の分類項目名として、「史伝」が用いられたケースの一つであろう。ちなみに、同じ「史論及史伝」の部を持つ『樗牛全集』の増訂縮刷版は、一九一四（大正三）年に新たに刊行され始める。

時代の推移による用語のずれは、他の全集編纂者にもみることができ。

荷風が「史伝考証に関するものゝ質疑は浜野知三郎君之を……」と言及した浜野は、鷗外追悼号の『新小説』（一九二二（大正十一）年八月）に、「考証物と歴史小説」という一文を寄せている。

「史伝」という語は、浜野や他の寄稿者の文中には見出せるが、この雑誌の原稿の標題に「史伝」という語を用いているものは誰もいない。現行の「史伝」は、ほぼ「歴史小説」に該当するようである。当時は、雑誌の欄名にはすでに「史伝」欄はほぼなかった点を併せ考えれば、これらは当然のずれといえる。

項目名としては、一九〇四年のジャンル編成に基づく名を採用している、一九一四年の『樗牛全集』。そして一九二三年の『鷗外全集』の同じ部立名。この時点での「史伝」の語の時代性、タイムラグを考えに入れねばなるまい。さらに『鷗外全集』編纂者は、この時点では

「史伝」の対象に一八九八（明治三十一）年の『西周伝』を含めているのだ。

以上から、刊行会版鷗外全集（一九二三（大正十二）年）一九二七（昭和二年）の時点で鷗外テキストを「史伝」と称する場合は、明治二十〇～三十年代の用法ではあるが、それはすでに一般的表現ではなくなりつつあった、と言えるだろう。

### 3

ここまでの考察から言えば、鷗外テキストを「伝記」「文学」「考証」「歴史」「小説」などと均等に区画する作業は、時代性を消してしまふことにつながりかねない。

そこで、改めて鷗外の歴史記述テキストの諸特徴を、初期の明治二十年代から振り返ってみる。

①一八八九（明治二十二）年、鷗外は『東京医事新誌』に「ペツテン コーフェルノ逸事」や「コッホ師印度紀行抄」などを寄せているが、これらは考証であると同時に伝記である。物語性を帯びず、狭義の「文学」に該当する近代小説風の、まとまりを持っていない。特に、一八九一（明治二十四）年七月九日発行の『衛生療病志』「ロオベルト、コッホが伝」などは、必ずしも「偉人」ではない個人の伝記、プロット抜きのエピソード群、巻末の参考資料等のリスト添付、結末部分のまとまりのなさ、事務的な事後報告の列挙、引用の頻出、

考証を頻繁に用いる、等の特徴を備えている。これらの特徴はすべて大正期以降、「いわゆる鷗外「史伝」」が開始されて初めて、鷗外が伝記を執筆する際に備えた特徴と見なされがちなものばかりである。だが鷗外の、最も早い執筆は、そもそも一八八一（明治十四）年の「河津金線君に質す」という考証であり、考証的伝記を大正期特有と考えるわけにはいかない。

これらの掲載誌は、基本的に医学雑誌である。しかし考証色も強い。狭義の「文学」成立以前には、このような中間的な歴史記述テキストは、学会誌から排除するべき「創作」作品とは、考えられなかったのではないか。また逆に、「史学」等の「学」も平岡氏の指摘通り、雑多な要素を許容していたといえる。鷗外は生涯を通じ、多様かつ大量のメディアに、こうした考証風のまとまりのない雑文・随筆を書いている。

② 一八八九（明治二十二）年から一八九二（明治二十七）年の『志がらみ草紙』には、随筆でも考証でも伝記でもある、同時期の偉人伝とも異なる、埋もれた歌人の発掘伝記が欄名を持たずに頻出している。<sup>(12)</sup> 本稿では、こうした考証的随筆のカテゴリ名のみを問題としているが、テキストの内容・文章様式自体は、近世以来の伝統と指摘することができる。<sup>(13)</sup> つまり、この文章様式自体は鷗外の独創とみなすわけにはいかない。この様式と「史伝」という分類項目名の間には、少なくとも『志がらみ草紙』の場合、直接の因果関係は見出

せない。だが名称はともかく、ジャンルとしても様式としても、存在していたことは確かなのである。

このように、鷗外が随筆でも考証でも伝記でもある、埋もれた文人の発掘伝記を、曖昧な欄名（あるいはジャンル名）で執筆したとしても、それを大正期特有の現象と断定する根拠にはならないのである。ただし、こうした考証風随筆は短いテキストは多くても、いわゆる鷗外「史伝」ほどの長さはない方が一般的であろう。また、語り手や視点人物等、近代小説特有の概念抜きには説明できない要素も多い。これらの要素は、大正期の狭義の「文学」概念をまっぴらして、初めて発生しうるものである。広義の「文学者」山路愛山は先述のように、狭義の「文学」概念から遡及的に論じようとすると、排除されてしまう。しかし鷗外は、ジャンル編成概念は広義の「文学」概念のまま、その上に、時代様式として大正期小説の諸特徴を導入したのではないだろうか。

③ 『西周伝』（一八九八（明治三十一）年）、『能久親王事蹟』（一九〇八（明治四十一）年）などにはすでに、必ずしも「偉人」ではない個人の伝記、プロット抜きのエピソード群、巻末の年譜添付、結末部分のまとまりのなさ、題名の人物の死後も続く事務的な事後報告の列挙、引用の頻出といった性質が備わっている。ある程度の長さを持った一巻の作品としては、先述の随筆群よりは狭義の「文学」概念に、該当しやすくなっていると言えるだろう。

また、段を下げた小活字部分をしばしば混在させる様式で、傍証的な考証・エピソードを本文に適宜加えつつ本文を進行させてゆくのは、先述の『志がらみ草紙』始め、明治の多くの「史伝」その他で、珍しくない書き方である。

以上、二十年代以来の鷗外の歴史記述は、多くの点で大正期の「いわゆる鷗外「史伝」と書式はほぼ同じである（必ずしも「偉人」ではない個人の伝記、巻末の年譜や参考資料リスト添付、結末部分のまとまりのなさ、個人の死後の引き続いて発生する事象の事務的な列挙、引用の頻出、考証的）。

これら諸特徴を要約すれば、プロット抜きの資料編纂による伝記である。この作家様式上に、各年代ごとの、様々な時代様式が交差しているのである。

この意味で、近世からの随筆ジャンルの伝統——『志がらみ草紙』を通して——を継承したがゆえの作家様式、という観点を付け加えるべきであろう。

## おわりに

以上から「史伝」の用例を概括すると、次のように定義することができる。

### ① 明治二十年代から三十年代を中心に、当時の広義の「文学」

概念の下位に属する概念としての中間的な歴史記述テキストを、雑誌に掲載する際の暫定的な分類項目名として、「史伝」「史論」「史談」などが用いられた。

### ② 「史伝」は、利用者（筆者・編纂者ら）によって、主観的標徴に基づいた分類概念として用いられる。また、歴史学と対峙する「歴史」「物語」の一種であるなど、他のジャンル概念に付随する用例も見られる。

### ③ 鷗外「史伝」は、基本的には明治二十年代から一貫している。（偉人ではない個人の伝記、巻末の年譜や参考資料リスト添付、結末部分のまとまりのなさ、個人の死後も引き続いて発生する事象の事務的な列挙、引用の頻出、考証的）

### ④ ①から、「史伝」欄は過渡期の弱い「中間的な歴史記述」ジャンルの呼称であると言える。②から、明治「史伝」は時代様式であるといえる。③から、鷗外「史伝」は作家様式であるといえる。

様式・ジャンルの両「史伝」が、雑誌の分類項目として需要・供給間にコンセンサスを持って流通したのは、明治二十（三）十年代が中心と言える。『美術評論』では西洋美術史を「史伝」欄としているが、これは歴史記述も広義の「文学」（＝歴史・伝記・随筆・美術）ジャンルに分類していた、この時期特有の現象とみられる。そしてこの時期の一般的なジャンル・様式編成に、鷗外「史伝」＝鷗外の歴史記述

テキスト全般は、適合しているものと考えられるだろう。

大正期に至ると、「文学」は狭義の小説ジャンルとして独立する。

それまで明治の時代様式・明治二十～三十年代の弱いジャンルの、両「史伝」に妥当していた鷗外のテキストの特性は、以前のコンセンサスの消失により、主観的標徴Ⅱ様式として機能し始める。

すなわち、明治二十～三十年代までの歴史記述ジャンル・時代様式  
の特性が、鷗外という、一作家の様式の主要部分として生き続けたの  
ではないだろうか。

さらに大正期の私小説志向という様式が、これまで同様、時代様式  
として鷗外・作家様式に作用した。時代様式と作家様式の交差上に、  
テキストが発生する。

つまり、従来エポックメイキングとされてきた『興津弥五右衛門の  
遺書』は、特異な作家様式へ特定の時代様式（Ⅱ大正期の私小説様  
式）が交差して生じた、「史伝」様式の局面のひとつなのである。

以上が、一見乃木殉死に触発され、「突然」開始されたかに見える  
鷗外の大正「史伝」の、複数階層に分かれた成立背景であり、成立要  
因であると結論できよう。

#### 注

(1) 昭和期まで存命した幸田露伴の、露伴「史伝」との関係について等、  
竹盛天雄氏から指摘があった。この問題は、稿を改めて論じる。

(2) 「北村透谷と山路愛山」『国文学』（一九六一年九月）、のち『北村透谷

研究』（有精堂出版、一九六五）所収。本稿への引用は『北村透谷研究』  
による。

(3) この問題についての近年の研究には、鈴木貞美『日本の「文学」概  
念』（作品社、一九九八）がある。

(4) 「解説」『家庭雑誌 解説・総目次・索引』（不二出版、一九八七）、八  
～十頁。

(5) 吉田常吉「解題」『維新前後実歴史伝 三』（日本史籍協会編（引用は  
続日本史籍協会叢書の覆刻版）、東京大学出版会、一九八〇、八頁。同書  
を見ると、「史談」と「史伝」のジャンル上の類縁性が認められる。

「維新前後 実歴史伝」の編者西河称が記す例言によれば、子爵海江田  
信義が多年自ら関係し見聞した国事につき口述するところを執筆し、脱稿  
の後、海江田子の検閲を経たとある。（中略）

あたかも本書の出版が完結する前月、すなわち明治二十五年九月、民間  
の有志者によって設立された史談会から、「史談会速記録」第一集が発行  
され、昭和十三年四月まで延々と続く。

海江田子の本書の編述が、いわゆる実歴史ものの出版に拍車をかけたの  
であろう。これ以後実歴史ものが続々と出版される。すなわち福地源一郎  
（桜痴）の「懷往事談」（明治二十七年四月）、大隈重信の「大隈伯昔日譚」  
（同二十八年七月）、勝安房（海舟）の「氷川清話」（同三十年十一月）、山  
県有朋の「懷旧記事」（同三十一年十一月）、田辺太一（連舟）の「幕末外  
交談」（同上）、松平慶永（春獄）の「逸事史補」（旧幕府）第二巻第九号  
―第三巻第三号所載、同三十一年九月―同三十二年三月）、勝安房の「勝  
伯昔日譚」（同三十二年二月）・「海舟余波」（同年三月）等、数年にして旧  
諸侯・旧幕臣・旧藩士六名の実歴史が出版された。（中略）

明治三十二年、海江田子は雑誌「太陽」第五卷第二号（二月二十日発行）および同三号（二月五日発行）誌上に「海江田子爵直話」として、安政五、六年の政情を中心に万延元年までのことに触れ、己れがいかに関与したかを発表した。雑誌編集人の付けた題名が「実歴史伝」であった。……」（同書一八頁）。

また、ここで名の挙げられている勝安房の談話「氷川清話」は、『女学雑誌』の「雑録」欄にその一部が掲載されている。そして『女学雑誌』の「史伝」欄と「雑録」欄には、同じように回顧談・女性の心得等が載る等、内容に共通点が見出せる。

（6）引用は復刻版（名著普及会、一九九〇）第一巻、二十六頁。

（7）引用は復刻版（ゆまに書房、一九九一）第一巻、二十三～二十五頁。

（8）引用は復刻版（臨川書店、一九八四）第十二帙、十八～二十頁。

（9）鈴木前掲書、二四七頁参照。

（10）坪谷善四郎『博文館五十年史』（一九三七、博文館）、六七頁、一三六頁等参照。

（11）岩波書店、一九六三。

（12）「和哥大ニ衰ヘテノ後、天斯道ノ為ニ二人ノ偉人ヲ生ジタリ此二人、其齡ハ相距タラヌニアラズト雖……」（中略）……其人々ハ誰ゾ即小沢蘆庵ト香川景樹ナリ景樹ノ伝ハサキニモノシツ今蘆庵ノ伝ヨツクル小沢蘆庵名ハ玄仲通称ハ帯刀、蘆庵ハ其号、又観荷堂ト号スモト尾張竹腰家ノ人ナリ……」（中略）……蘆庵ノ時流ニ重ンゼラレシコト如

此附蘆庵叢話

蘆庵曾テ金五両ヲ以テ箏ノ琴ヲモトメケルニ中島道成之ヲ見テイタクホメケレバ蘆庵曰ク御身ホドノ上手ガ一ツノ名器モ持チタマハヌハ日頃憾ニ

オモヒシ所ナリ……（中略）……蘆庵打笑ヒテ世ニハ似タルコトモアリケリ我モ昔靈山ナル嘯子ノ墓前ヲスギテ其歌ノ風ヲワルクシタル罪ヲ責メテ墓ヲ打タ、キシコトアリト物語リテ互ニ打興ゼシトゾ

本伝ハオモニ近世叢話ニヨリ傍古学小伝ヲ参酌ス然レトモ古学小伝モオモニ近世叢話ニヨリシト見ユ（近世先哲叢談ノ如キハ悉ク近世叢語ノ文ノマ、ナリ）蒲生君平ノ条ハ曲亭雜記ニヨル」（井上通泰「小沢蘆庵ノ伝」『志がらみ草紙』（創刊号、明治三十二年）、引用は覆刻版（臨川書店、一九九五）第一号、十～十一頁、傍線は小活字部分）

試みに、そのうちの一つを引用した。プロット抜きのエピソード群（表題人物の物語化されない事象群）、埋もれた人物の伝記、啓蒙の意図の薄い随筆風の伝記、考証的など、「いわゆる鷗外「史伝」」に見られる基本的諸特徴でもある。

（13）十川信介氏からご指摘を頂いた。本稿は明治二十～三十年代の「史伝」カテゴリー名、カテゴリー意識を核として考察を進めた。そのため、十川氏、鈴木貞美氏、竹盛諸氏のご指摘を、踏み込んで論じられなかった。ただし、本稿の問題意識の限定は、稿者の現時点での能力の限界にすぎない。別稿で改めて、諸問題を論じたい。

\* 引用は「鷗」以外旧漢字を新漢字に改め、ルビを除いた。

\* 本稿は、日本近代文学会春季大会（平成十一年五月二十二日、於早稲田大学）における口頭発表「鷗外「史伝」と明治「史伝」」に基づくものである。発表準備時・発表時・発表後における多くの方々のご教示に感謝する。

（本学専任講師・国文学）